

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	アシナ・カクリ「切られた首」
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 26 : 95 - 87
Issue Date	2020-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050193">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050193</a>
Right	Copyright (c) 2020 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



## アシナ・カクリ「切られた首」

橘 孝司 訳

國立臺中科技大學應用日語系 助理教授

漂うような幅の狭いシヨールはもちろん一九二三年の古い流行だった。とつくに廃れていたし、お望みなら、再流行の兆しはまだないと言いつつ換えてもいい。何にしろ、ニオヴィはそれをまとい続けた。倒れた石柱の上で、日替わりの雑多な集団を前にギリシヤ芸術の栄光を説明する際、首と肩の周りではためく様子が自分にはとても似合っていると思っていた。シヨールとともに彼女の声——なんと四カ国語を駆使するのである——は風に乗りに、かつての金色をとどめる長い髪が颯爽と風に舞い、異国風の腕輪で飾り立てた手も風を切った。全てが風を思わ

せ、その心は時が経とうとも、いわゆる「人生経験」などによって干涸びてしまうことはなかった。青い目はときめきやすい青春時代の純朴な熱狂を今もたたえて人生と向き合っていた。その点で、アテネの人が彼女を見れば、少々イカレていると感じるのだが、それでもギリシヤで最優秀のガイドの一人であることは間違いない。しかもたいてい彼女の個性は——人の年輪よりも魅力の方が圧倒的に肝心だといわんばかりに、半分崩れた古代遺跡の中で最上の位置を見つけるのに長けており——ギリシヤ旅行で最も強烈な印象を外国人客に残すのだった。

おそらくはまさにこのために、アンティステニス彼女を受け入れがたかったのだろう。土地の美術的遺産への情熱。考古学への一途な想い。さらには、研究者ではなく単なる《番人》に貶められた（書類には《古代遺跡管理者》と書かれようが）という抑えられない怒りを抱きながら八年間恵まれない仕事に従うことで刻み込まれてしまった相当な偏屈さから、アンティステニスは王座篡奪者を睨む忠臣のような目でニオヴィを見ていた。手足の取れた大理石像ではなく、彼女に見とれる旅行客にイラ立ち、あの女は自らを見せつけるために聖なる遺物を利用してると信じていた。完璧なるものを生み出

した精神を幾ばくかでも理解したという幻想を与えながら無知な外国人を騙していると思うと、ゾツとした。

さて、事件がガイドのニオヴィの手近で、しかもアンティステニスの管轄で起きたというのも、運命が密かに交わったことだろう。密かであり、同時に避けられないことだった。近隣の国の商業代表団がやって来て、歓迎プログラムにギリシャの産業視察が組み込まれた際、当然ニオヴィがガイドに選ばれたからである。もちろん、色を添えようと旅程を多少増やし、水力発電施設の後にはいくつかの古代遺跡が無理やり入ることになった。当然アンティステニスの博物館もそのたくらみに乗った。博物館は実のところまだ整理されていない倉庫も同然で、大小の青銅の発掘品、器のかけら、巨大な甕、モザイクの破片などが、ただただ国の補助金を待っていたのである。

アンティステニスは三台の黒い公用車が近づいてくるのをいつものイラ立ちで見つめた。自分を通すなら、観光客など法を盾に禁止するし、ガイドどもは「アマチュア熱」なる感染症の媒体として警察の監視下に置いてやる。ニオヴィは——自分を嫌っている人間が存在する

とはこれっぽちも想像できないあの女は——楽しげに走り寄ると、手をヒラヒラさせて彼にあいさつした。

「なんてすばらしい日かしら！ 魔法のような世界！ここに來るたび、あなたはなんて幸せなのって思っってしまう……」

そしてバレエダンサーのようにくるくる回った。

「今日はまた誰を連れてきたんだ？」とアンティステニスは不平をもらした。

「ビジネスマンよ。でもとりわけ感じのいい人たちね。あそこの「メルセデス」のそばに立ってるのが、団長。

あの目は「御者の像」（デルファイ考古学博物館の有名な青銅像）を思い出させるわね。

ああ、若い人たちが引つ張ってるあの国って本当に羨ましい。ほら見て。まだ三十半ばを超えてもないのに、一国の対外ビジネスを率いてるのよ」

「木と鉄と無駄な書類ばかり！」アンティステニスは唸る。「やつの国には外国との取引なんてないぞ」

「これからできるのよ！」ニオヴィはうつとりした素振りて天を仰ぎ見た。

しかし、その前に、隣のカフェニオ（伝統的タイブの喫茶店）に座っている男性の姿が目に入った。そこで、至福の天空から慌てて視線を下ろし、いまや全く違った調子で尋ねた。

「あそこにいるの、ナソス・ダポンテスじゃない？」

そして、考古学者がしわがれた声で「そうだ」と言うのも聞かないうちから、叫び始めた。

「ナソス！ ナソス！ あなた、どうしてここに？ わざわざこの陰気な人に会いに来たなんて言わないわよね？」

続く五分間、二人の男たちはニオヴィのおしゃべりとシヨールと髪とに絡みつかれてくしゃくしゃになっていった。そうやって彼女が仕事に戻り、ようやく解放されると、少しくラクラしながら、

「なかなか楽しませてくれる女だね」ナソスは空の長旅の後大地を踏んだばかりでなお呆けている、といった調子で微笑んだ。

アンテイステニスは何やらむかつくことを唸った。

「そんなことはないよ！」ナソスは答えた。「心は善良だ」  
「ああ。そして鳶のように絡まってくる」

実際ニオヴィはごく自然に石柱を抱きかかえながら大声で案内を始めていた。

アンテイステニスは鍵を回し歪んだ木のドアを押し開いた。

「食わせものめ！」四人の商業使節団を博物館の中へ通しながらつぶやいた。

自分が様々な発掘品を説明するべきだったが、まったくもってそんな気にはなれなかった。ドアのそばに立って、四人の頭があちこちのテーブルをのぞき込むのを見ていた。心の底ではナソスがうらやましかった。今もカフェニオに座って、こういった聖遺物冒瀆の現場を見ずに済んでいるのだ。

「聖なるものを犬どもに与ふことなかれ（新約聖書「マタ

：」と、心の中は煮えたぎっていた。しかし商業使節団

の方は少々刺激の強すぎる、とはいえ興味深い造形を施された人型の水差し口をことのほか面白がっていた。

そもそもアンテイステニスの不幸は内気な性格だったことだろう。臆病に近いほど控えめだったため、迅速で決然とした態度が必要な瞬間にマヒしてしまうのだった。出遅れた瞬間は後になっていわば棘に覆われた境界の壁のように聳え立ち、この世界の魅力ある側に触れることさえ許してくれなかった。あるいは、彼の中で渦を巻きつつ速度を増して発射され、最初のきっかけとは釣り合わないほどの怒りの爆発となるのだった。

いやいや、特に今回きっかけが十分ではなかったとい

うわけではない。というのは、ニオヴィが初期幾何学文様期の装飾を事細かく説明していく一方で、使節団の団長が少し離れたところで、風変わりな小さいブロンズの群像を持ち上げ、しばらく矯めつ眇めつしてから、こっそりポケットに入れたのである。

アンテイステニスが目玉が眼窩から飛び出すかと思っただ。卒中を起こしそうになり、怒りと無念の波に何とか持ちこたえた。十分後、一団が博物館を出た後でやっと、何とか最初のことばを発した。当然ニオヴィに食ってかかる。

「取り戻してくれ！ 取り戻しに行くんだ！」

「あなた大丈夫？ あの時に近づいて、冗談めかして取り戻すべきだったのよ。今さら……」

「けっこうだ！ じゃ警察を呼ぶ！ 警官にあいつを逮捕させてやる」

「あなたねえ、こっちはそんな無礼なことできないわ。公式の訪問団なのよ」

「それがなんだ？ 奴隷根性ってやつだな！ 公式だから、おれたちは身ぐるみ剥がれるのを座って待ってってことか？」

「あら！ 『身ぐるみ剥ぐ』って言ったわね。アイデア

が浮かんだわ。夜寝てる間にこっそり部屋に滑り込んで……」

「冗談はやめてくれ！」

「へえ、じゃどうしろって言うの？ とっても微妙な問題よ。じゃ、ナソスを呼んで助言してもらいましょう」

ナソスはニオヴィと同じ意見だった。急ぎすぎて見苦しい騒ぎを起こすのはよろしくない。

「おれたちの恐ろしいお隣りさんが宣戦布告してくるわけじゃない！ あいつらは、まだ鼻もかめないガキたちだ」とアンテイステニスは吠えた。「商売の契約のためにここに連れてきてどうするってんだ？ あいつらの土地にはイノシシが巣くってるだけだろ。とにかくだ、ヤツらがアテネに出発する前に像を取り戻すか、明日新聞の一面に事件が出るかだ」

「正確には、あれ、何なんだい？」ナソスが尋ねる。

「保存状態申し分ないブロンズ像だ。テーマは子どもの略奪……おそらくは『ゼウスとガニユメデス像』だろう」

「そういうことなのね！」ニオヴィは手を叩いた「ガニユメデスが女の子だと思ったんだ。そんなことだろうと私も思ったわ。『御者の像』みたいな目の男、何を考えた

のやら……」

「とにかく立派な盗みだ。女の子だろうが男の子だろうが関係ない」

「関係はあるでしょう。あの人たちの国には今もハーレムがあるんだから」

「合理主義的な社会組織のくせにまだ廃止されていないと言うのかい？」ナススは尋ねた。

「廃止するもんですか。ハーレムは経済的な平等を確保するから……」

「ハーレムも経済もどうにでもなれ。おれは像を戻したんだ」

「そのことを言おうとしたのよ。少女じゃなく、ガニユメデスを略奪した——バカな人ね、犯行の時は気がつかなかったに違いないわ——そうわからせてやったらすぐに返してくるわよ」

「素晴らしいアイデア！ 国王レベルだ！」アンティステニスはこの上なく恥ずかしいといった口調で彼女を見てから、「お前もあっちへ行け！」カッカしながら、彼の手にピンクの紙片を何とか握らせようとしている村の子供に怒鳴った。

「なんなの、それ？」ニオヴィが不思議そうに尋ねた。

「知るかい。子供だましき。《切られた首、問答いたします》だと。おそらく奇術師だろう。ここ一週間ほど広場の向こうの小屋にかかっているやつだ」

「奇術師！ 奇術師ですって！ それよ、わたしたちが探したのは」ニオヴィが叫んだ。

「どれほどの腕かによるね」ナススは言ってタバコを一口吸った。

「二人とも何の話だ？ 全然わからないぞ」

「あのねえ」ニオヴィが言う「とっても簡単なこと。わたしが使節団を見世物に連れていくでしょ。あなたたちは奇術師と示し合わせて……」

「盗っ人のポケットから像をこっそり抜き取るのか？ 今日には冴えすぎて、おつむがバラバラだな！」

「いいじゃないの？ ナスス、どう？ いいアイデアでしょ？」

アンティステニスは話させなかった。

「何がいいアイデアなもんか！ 奇術師なんてトリックをいくつか知ってるだけだろ。あそこの奴なんか二つ以上知ってるかどうか。おれたちが考える通りにやってくれると思うか？」

一瞬、二人は怒れる鬪鶏のように睨み合ったが、まず

ニオヴィが冷静さを取り戻した。

「好きにすればいいわ」と言った。「でも一人でやってね。わたしはアテネであれこれ言われたくないから」

「覚えてるかな」ナソスが突然もの思いから覚めた。「銀の食器に関する例の逸話を？」

「ああ！ お前から二人ときたら。耐えられない！」アンティステニスはいきり立って言った。「ひとりは奇術師、もうひとりは逸話だと！ 結局は警察に行くしかなさそうだ」

奇術師の仮小屋は屋根のない中庭に、即席ながら巧みに亜麻布を張りめぐらせたものだった。飾り付けとかきまぐれな天気備えてではなく、ただチケットを持たない野次馬の目を遮るためだった。庭の奥のテーブルの上になにやら茶色の液を塗りたくられた《切られた首》が載っていた。アラビアから運ばれしこの首は——皆様、さあ、お立ち会い！——口にするはバナナのみ。知らぬ者が近づけば猛り狂って噛みつくやも知れませぬ……というわけで、一メートルの距離に縄が張られ、劇団長だけが跨ぐのを許されていた。その物々しい隔離以外に《切られた首》には別の特権があった。客がたいして入らない

暇な時、劇団員たちは皆日給を求めてオリーブ集めに駆り出されたのだが、《切られた首》はそれを免れていたのだ。

商業使節団メンバーに対して、テーブルの皿の上に置かれた首は、まさに《切られた首》なり、という印象を与えた。劇団員たちは外国客訪問の榮譽に感じ入り、要求にこたえようと最善を尽くしてはいたが、他の演し物はそれほど魅力的ではなかった。しかしもちろん、奇術師の登場とともにある種の高揚が生じた。その男は、かつて緞帳の一部でいまだ壮麗さを保つ赤いマントにすっぽりくるまっていた。顔には仮面をつけ、長い付けヒゲが垂れ下がっていた。幾分奇妙な発音が触れ込みのインド出身のせいなのか、あるいは、やたらと口の中に絡まるその髭のためなのかは明らかでなかった。

「紳士淑女の皆様ア」と言って外国人の方に向かい深くお辞儀をした。「本日もご覧いただくのはいかなる碩学大儒すら及びもつかぬ奇跡中の奇跡。倫敦、巴里、紐育と驚嘆させた出し物にございます」

手で陣太鼓をボーンと打ち、響きが消えるや否や、厳かに宣言した。「非物質の実体化なりイ！」

それから探るように観客に目をやり、アンティステニ

スを選ぶと、張られた縄のそばに招いた。盛り上がった帽子から卵を取り出し、厳粛な手つきでぐるりと示すと、ポケットの中に入れるよう考古学者に求めた。再び太鼓の音。

「卵や卵、いずこなり？ この紳士のポケットかいの？」

無然とした様子でうつむきながら、アンティステニスは卵がポケットにないことを観客に示した。

「卵や卵！」再び奇術師は呼びかけた。

すると突然、その目は怒りの色を帯びニオヴィの上に乗った。指をこすり合わせて叫んだ。

「現れ出でよ！」

ニオヴィは皆の視線を浴びながら身体中を探り始めた。バッグから卵を取り出すと、興奮して小声を漏らせた。

「まただわ！ さすが！」

そして外国人たちに向かい、「すごいじゃないですか！」

インドの奇術師が恭しくお辞儀をするとまばらな拍手が起こった。割れるような興奮が起きたわけでもないのに、片手で静めるフリをしながら、

「紳士淑女の皆様ア、得心いただけぬ様子ゆえいま一度。だが、今度は卵ではござらぬ。卵なんぞいかほどのもの、たわいもない、とおっしゃるであろう。ちっとば

かしの風によってさえ、一瞬で消えまた現われましょう。なおかつ、この世には何千何百万の卵があります。なるほど、たまたまご婦人のバッグの中に卵があったやもしれぬ、とおっしゃる。そうでござるね。しかるにイ、ここなるもの、これをご覧じろ……紳士淑女の皆様。芸術の一大傑作、類なき逸品。居並ぶ群像の中にありて極上の恋愛像、博物館もついで目にしたことのなき至高の作品でござる。さあ、芸術を解するそのご仁よ、とくにご覧になられよ。して、ポケットに納めなされ、いざいざ」

アンティステニスは少しばかり怪しげな挙措で無理にポケットに入れた。

「ずつしりとしておろうが」奇術師は尋ねた。「その塊、その物体、重き金属のその巖がただワタクシの身体より出づる精神神経光線によってかき消えることなどあり得ない、とお思ひかな？ 不可能なり、とおっしゃるだらうて！ だが、すぐにわかるであろう。されど、このワザはむずかしい、実ウにむずかしい」

効果を強めようと唸り声をあげ、  
「……紳士淑女の皆様、ワタクシが動いておるように見えるか？ いやいや！ モノが動いておるのじゃ。」



なにゆえか？ 今こそ明かそう！ これぞ非物質の実体化なり！ 見えざる力がものを運び去ろうとしておる：見えざるものが漂っておるわ……」

「現われ出でよ！」の声とともに、小像はもちろん使節団団長のポケットで見つかった。

「悪くはなかったな」アンティステニス是指摘した。「ただ言葉づかいがときどき怪しかった」

「ちゃんと評価してくれないのかい」ナソスは仮面を外しながら言った。「結構キレのいい言い回しもあったはずだけど」

「うーん、ちよつとばかしよかった。もつと気の利いたセリフを聞いたことはあるがな」

「ぼくはとにかく楽しめたよ。君はガニユメデスを取り戻したし。劇団に百ドラクマばかし払ったけど、まあいい。で、なんで冴えない顔してるんだ？」

「何をやらかすつもりか言ってくれなかったからな。準備もできなかつた！ 盗まれた像に似たのを博物館で見つけるようにと頼まれただけだ。ポケットからなくなつたなどと、あんな嘘八百をあれこれ並べ立てなけりやならないなんて！ どこかの小賢しい奴がおれの身体を探

すように言い出すんじゃないかと、冷や汗びっしょりだったぞ」

「それもよかつたな！」ナソスが笑い声を上げた。「でも、傑作はニオヴィの役どころだった。バッグに卵を見つけた時の驚きの演技、見てたかい？ ちようど自分で入れた場所なのに。おめでどうを言わなくちゃね」

しかし、ことはそれほど単純には終わらなかつた。ニオヴィは四人の外国人を引き連れて劇団長を取り囲み、《切られた首》のトリックを説明させようと迫っていた。使節団の団長の頭に浮かんでいるはずの疑いを刺激しないように、ナソスは人知れずその場を離れた。

しばらくして、三台の黒い公用車は砂ぼこりを上げて去って行った。先頭の窓からは長いシヨールが翻っていた。

アンティステニスのポケットには、二つの像の下から、つぶれた卵の粘っこい液があふれ出ていた。

小屋の中では《切られた首》が《問答》を続けていた。

## 【解説】

ここに掲載したのはギリシャの代表的なミステリ、歴史小説家アシナ・カクリ女史 *Ἀσίνη Κακροῦρη* の「切られた首 *Ἡ Κομμένη Κεφαλή*」の全訳である。同名の短編集（十三篇収録、二〇〇一年、エスティア社刊）に収められているが、もともとは一九五〇年代末から六〇年代前半にかけて雑誌『郵便夫 *Ταχυδρόμος*』に掲載された一連のカクリ・ミステリ短編の一つである。

カクリには三人のシリーズ探偵がいるが、本作に現れるのは国を越えて事件を追う国際警察刑事ナロス・ダポントスである。事件は見事に解決するのだが、少々弱気な性格で周囲の強烈な個性の女性に振り回されることが多く、ユーモア調の作品に現れる。

この作品も、「涙のためのハンカチ」同様、近年ラジオミステリ・ドラマ・シリーズ『泥棒と警察』 *Κλέφτες και αστυνόμοι* (902 *Απίστευτά*、二〇〇八〜二〇一〇) に登場しており、新しい世代のミステリファンのために、以下のような短い導入が付されている。

「この物語は遠い昔、観光客が私たちの国へ足を運び始めた頃のこと。北の隣国の体制に私たちは様々な幻想を抱いていた。バナナはまだ珍しくて高価な品だった」

ギリシャではすでに内戦が終結し、アメリカの支援を受ける右派政権の下で都市部が繁栄し、観光業が盛り返してくる一方で、世界では東西冷戦が先鋭化していった時代を背景としている。

アシナ・カクリ女史については「涙のためのハンカチ」拙訳（『プロピレア』二十五号（二〇一九）、八十九〜一〇四頁）の解説やウェブマガジン『ミステリー大賞シンジケート』掲載の「ギリシャ・ミステリへの招待 第二回 ヤニス・マリスを継ぐ人々」(<http://honyakumystery.jp/8022>)を参照していただきたい。

今回も作品の翻訳を快く承諾してくださったアシナ・カクリ女史に心よりお礼申し上げます。